

一 次の1～4の問いに答えなさい。

- 1 次の――のひらがなを漢字に直しなさい。送りがなが必要なものはそれも書きなさい。
- ① 初対面の人といきどうこうする。
 - ② 突然の停電で、客はうおうさおうした。
 - ③ 親のありがたみをつうかんした。
 - ④ きんせいのとれた体つきだ。
 - ⑤ 商品のざいこが切れた。
 - ⑥ 手間をはぶく。
 - ⑦ 流れにさからって泳ぐ。
 - ⑧ 保護者の席をもうける。
 - ⑨ 判定に異議をとなえる。
 - ⑩ 列車は海岸線にそって進む。

2 次の――に入る表現を、それぞれのア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ① 昨日はM氏と二人きりだったこともあって、会社の将来について腰を――話し合った。
アⅡ割って イⅡ抜かして ウⅡ入れて エⅡすえて オⅡ折って
- ② コンクールで僕の絵が入選したので、鼻を――母に報告した。
アⅡ鳴らして イⅡ明かして ウⅡ高くして エⅡつまんで オⅡつきあわせて
- ③ 家で犬を飼うように何度頼んでも、父は首を――ない。
アⅡ長くし イⅡ縦に振ら ウⅡ横に振ら エⅡ斜めにし オⅡかしげ
- ④ 現在のインフレに対して、政府もただ手を――いたわけではない。
アⅡ休めて イⅡ尽くして ウⅡ汚して エⅡこまねいて オⅡついて

3 次の――に共通して入る漢字一字を書きなさい。

- ① 菜に塩／――は藍より出でて藍より――し
- ② の祭り／――は野となれ山となれ
- ③ の光は七光り／――はなくとも子は育つ
- ④ に竹をつぐ／――に縁りて魚を求む

4 次の――の意味として、よいと思われるものをそれぞれのア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ① 町で若者に道を聞いたたら、「あっち」というふつきらばうな答えが返ってきた。
アⅡ嫌々ながらの イⅡ一方的な ウⅡ無愛想な エⅡ無遠慮な オⅡ礼儀知らずの
- ② 今日是不漁で、めばしい獲物は一匹もかからなかった。
アⅡ目立つ イⅡお目当ての ウⅡ味の良イ エⅡ珍しい オⅡ値打ちのある
- ③ 長く滞在するわけではないので、さしずめ必要なものだけをカバンに入れた。
アⅡ即座に イⅡあたかも ウⅡさすがに エⅡさしあたり オⅡ仕方なく
- ④ 工事は無事完了し、現場監督は作業員一人一人にねぎらいの言葉をかけました。
アⅡ真心 イⅡ賛辞 ウⅡ祝福 エⅡはげまし オⅡいたわり

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

見える人と見えない人の空間把握の違いは、単語の意味の理解の仕方にもあらわれてきます。空間の問題が単語の意味にかかわる、というのは意外かもしれませんが、見える人と見えない人では、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違うのです。

【A】「富士山」。これは*難波さんが指摘した例です。見えない人にとって富士山は、「上がちよつと欠けた円すい形」をしています。いや、実際に富士山は上がちよつと欠けた円すい形をしているわけですが、見える人はたいていそのようにとらえていないはずだ。

見える人にとって、富士山とはまずもって「ハの字の末広がり」です。【B】「上が欠けた円すい形」ではなく「上が欠けた三角形」としてイメージしている。平面的なのです。月のような天体についても同様です。見えない人にとって月とはボールのような球体です。【C】、見える人はどうでしょう。「まんまる」で「盆のような」月、つまり厚みのない円形をイメージするのではないのでしょうか。

三次元を二次元化することは、視覚の大きな特徴のひとつです。「奥行きのあるもの」を「平面イメージ」に変換してしまう。とくに、富士山や月のようにあまりに遠くにあるものや、あまりに巨大なものを見るとときには、どうしても立体感が失われてしまいます。【D】、富士山

や月が実際に薄^{うす}っぺらいわけではないことを私たちは知っています。けれども視覚がとらえる二次元的なイメージが勝ってしまう。このように視覚にはそもそも対象を平面化する傾向があるのですが、重要なのは、こうした平面性が、絵画やイラストが提供する文化的なイメージによってさらに補強されていくことです。

私たちが現実の物を見る見方がいかに文化的なイメージに染められているかは、たとえば木星を思い描^{えが}いてみれば分かります。木星と言われると、多くの人はあの*マープリングのような横縞^{じま}の入った茶色い天体写真を思い浮かべるでしょう。あの縞模様の効果もありますが、木星はかなり三次元的にとらえられているのではないのでしょうか。それに比べると月はあまりに平べったい。満ち欠けするという性質も平面的な印象を強めるのに一役^⑤ E いそうですが、なぜ月だけがここまで二次元的なのでしょう。

その理由は、言うまでもなく、子どものころに読んでもらった絵本やさまざまなイラスト、あるいは浮世^{うきよ}絵や絵画の中で、私たちがさまざまな「まああるい月」を目にしてきたからでしょう。紺^{こん}色の夜空にしっとり浮かびあがる大きくて優しい黄色の丸——月を描くのにふさわしい姿とは、およそこうしたものでしょう。

こうした月を描くときのパターン、つまり文化的に醸^{じょう}成された月のイメージが、現実の月を見る見方をつくっているのです。私たちは、まっさらな目で対象を見るわけではありません。^② 「過去に見たもの」を使って目の前の対象を見るのです。

富士山についても同様です。風呂屋^{ふろや}の絵に始まって、種々のカレンダーや絵本で、*デフォルメされた「ハの字」を目にしました。そして何より富士山も満月も縁起^{えんぎ}物です。その福々しい印象と^⑥ あいまって、「まんまる」や「ハの字」のイメージはますます強化されています。見えない人、とくに先天的に見えない人は、目の前にある物を視覚でとらえないだけでなく、私たちの文化を構成する視覚イメージをもとらえることがあります。見える人が物を見るときにおのずと^③ それを通してとらえてしまう、文化的なフィルターから自由なのです。

つまり、見えない人は、見える人よりも、物が実際にそうであるように理解していることになります。模型を使って理解していることも大きいでしょう。その理解は、概念的、^④ と言ってもいいかもしれません。直接触^{さふ}ることのできないものについては、辞書に書いてある記述を覚えるように、対象を理解しているのです。

^④ 定義通りに理解している、という点で興味深いのは、見えない人の色彩^{さいしき}の理解です。

個人差がありますが、物を見た経験を持たない全盲^{もくもう}の人でも、「色」の概念を理解していることがあります。「私の好きな色は青」なんて言われるとかなりびっくりしてしまうのですが、聞いてみると、その色をしているものの集合を覚えることで、色の概念を獲^{かく}得するらしい。たとえば赤は「りんご」「いちご」「トマト」「くちびる」が属^{ぞく}していて「あたたかい気持ちになる色」、黄色は「バナナ」「踏切^{ふみきり}」「卵」が属^{ぞく}していて「黒と組み合わせると警告を意味する色」といった具合です。

ただ面白^{おもしろ}いのは、私が聞いたその人は、どうしても「混色」が理解できないと言っていたことでした。絵の具が混ざるところを目で見たことがある人なら、色は混ぜると別の色になる、ということを知っています。赤と黄色を混ぜると、中間色のオレンジ色ができあがることを知っています。ところが、その全盲^{もくもう}の人にとっては、色を混ぜるのは、机と椅子^{いす}を混ぜるような感じで、どうも納得^{なちやく}がいかないそうです。赤十黄色^{せきじゅうきゅうしき}Ⅱオレンジという法則は分かっても、感覚的にはどうも理解できないのだそうです。

もう一度、富士山と月の例に戻^{もど}りましょう。見える人は三次元^{さんげん}のものを二次元化してとらえ、見えない人は三次元のままとらえている。つまり前者は平面的なイメージとして、後者は空間の中でとらえている。

だとすると、そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか、という気さえしてきます。見えない人は、厳密な意味で、見える人が見ているような「二次元的なイメージ」を持っていない。でもだからこそ、^⑤ 空間を空間として理解することができるのではないか。

なぜそう思えるかというと、視覚を使う限り、「視点」というものが存在するからです。視点、つまり「どこから空間や物を見るか」です。「自分がいる場所」と言ってもいい。もちろん、実際にその場所に立っている必要は必ずしもありません。絵画や写真を見る場合は、画家やカメラが立っていた場所の視点を、その場所ではないところにながらにして獲得^{くわく}します。顕微鏡^{けんびきょう}写真や望遠鏡写真も含め^くれば、肉眼では見ることのできない視点に立つことすらできます。想像の中でその場所に立つこうした場合も含め、どこから空間や物をまなざしているか、その点が「視点」と呼ばれます。

同じ空間でも、視点によって見え方が全く異なります。同じ部屋でも上座から見たのと下座から見たのでは見えるものが正反対ですし、はたまたノミの視点^{てんてん}で床^{ゆか}から見たり、ハエの視点で天井^{てんじやう}から見下ろしたのでは全く違う風景が広がっているはず。けれども、私たちが体を持っているかぎり、一度に複数の視点を持つことはできません。

このことを考えれば、^⑥ F 目が見えるものしか見ていないことを、つまり空間をそれが実際にそうであるとおりに三次元的にはとらえ得ないことは明らかです。それはあくまで「私の視点から見た空間」でしかありません。(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』)

〔注〕 *難波(創太)さん……一九六八年生まれ。三十九歳のときにバイク事故で失明し、全盲となる。

*マープリング……水よりも比重の軽い絵の具を水面に垂らし、水面に広がる絵の具の複雑な模様を、紙などに写し取る技法のこと。写し取られる模様が、大理石(マープル)に似ていることから、この名がある。

*デフォルメ……実際のかたちを誇張したり、変形したりして表現すること。

問一 【A】～【D】にあてはまる言葉として、よいと思われるものを次の中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

アIIでは イIIつまり ウIIだから エIIもちろん オIIたとえば

問二 (1) **E** にあてはまる言葉として、よいと思われるものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

アII演じて イII持って ウII負って エII買って オII助けて

(2) **F** 「あいまって」の意味として、よいと思われるものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

アIIあやまって イIIうらはらに ウIIぶつかり合って エII同様に オII合わさって

問三 ①「見える人と見えない人では、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違うのです」とありますが、富士山や月を思い浮かべる場合、見える人と見えない人ではどのような違いがありますか。空欄にあてはまる言葉を、本文より漢字三字で探して、書きぬきなさい。

富士山や月を、見える人は（Ⅰ）的にとらえるが、見えない人は（Ⅱ）的にとらえる。

問四 ②「『過去に見たもの』を使って目の前の対象を見るのです」とありますが、月の場合で言うと、これはどういうことですか。説明しなさい。

問五 ③「それ」は、何を指していますか。本文の言葉を書きぬきなさい。

問六 ④「定義通りに理解している、という点で興味深いのは、見えない人の色彩の理解です」とありますが、見えない人は色彩をどのように理解していますか。その説明として、よいと思われるものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 見えない人は、色に関する文化的なフィルターから自由なため、目の見える人よりも、色が実際どのような色をしているかを正確に理解している。

イ 見えない人は、直接目で色を確認することができないため、辞書に書いてある記述を覚えることで、それぞれの色がどのようなものを理解している。

ウ 見えない人は、その色をしているものの集合を覚えた上で、個人差はあるものの、その色に対する自分の好みや感情に基づいて色を理解している。

エ 見えない人は、色を見ることができないため、その色をもつものをまとまりとして覚え、そのまとまりからそれぞれの色がどのようなものかを理解している。

オ 見えない人は、どのような色にどのようなものが属しているかを思い浮かべ、それらを組み合わせることで色がどのようにして混ざるかを理解している。

問七 ⑤「空間を空間として理解することができ」とありますが、富士山の場合で言うと、これはどういうことですか。説明しなさい。

問八 ⑥「目が見えるものしか見ていない」とは、どういうことですか。説明しなさい。

問九 本文の内容に**合わない**ものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 木星は平面的なイメージに染められていないので、われわれは木星を実際のように立体的に思い描く傾向がある。

イ 見えない人が対象を立体的にとらえる傾向があるのは、模型を触ることで対象を理解することとも関係がある。

ウ 見えない人は、見える人よりも文化的イメージに縛られないため、自分の好きなように自由に対象を理解している。

エ 絵画や写真を見る場合、われわれは想像の中で、画家やカメラが立っていた場所の視点に立って見ている。

オ 目の見える人は、目が見えるものしか見ていないため、見ている対象を十分にはとらえていないと言える。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

瑞希が、「ところでさ、**昂樹**——」と前置きをしてから、「ほんとにこのままでいいの？」と尋ねる。

「このままって何が？」 何のことはわかっていたが、**あえて**訊くと、「**瑛士**のことに決まってるじゃん」瑞希が**A** **頬を膨らませる**。

「いいよ、別に。大丈夫だから放つというて」

「なんかさあ。見ないふりをしてるのも、もう嫌なんだよね。瑛士の馬鹿、今日のは**さすが**にちょっとやり過ぎだもん」

「でもさあ、瑛士くんにも可哀相なところがあるんだよね。あいつってさ、家で父さんにしょっちゅう暴力を振るわれてるし、まともにお小遣いも貰えないみたいだし。俺が瑛士くんだったら、やっぱりくれるかも」

「呆れた。あんたってどこまでお人好しなわけ？ そりゃあ、瑛士にも同情の余地はあるけどさ。でも、それとこれは全然別の問題じゃん」

「それはそうなんだけど、でも、本当に大丈夫だから」

① **大丈夫じゃないよ！** 大声を上げたのは葉月である。

驚いて葉月の顔を覗き込む。

葉月がこんな大きな声を出すのを初めて聞いた。瑞希も驚いたみたいで、昂樹と同様、目を丸くしている。

「このままにしてたら絶対ダメだよ。昂樹くんが我慢すればするほど、こういうのってエスカレートするんだから。だから、今のうちに何とかしなきゃダメ。昂樹くんが何もしないなら、わたしが先生にいつける。前の時はプロレスごっこで区別がつかなくて、^㉞うやむやになっちゃったけど、今度は今日あったことを全部先生に話す。いくら止めても無駄だからね」

言い終えた葉月の目が涙で潤っている。今にも泣き出しそうな表情に、昂樹のほうが^㉟うろたえてしまう。

「ど、どうしてそこまで俺のことを……」

「あんた、ばっかじゃないの」瑞希が口を挿んだ。

「えっ、なに？ どうゆうこと？」

「まだわかんないの？ 葉月ちゃん、昂樹のことが好きなんだってば」

「瑞希ちゃん、ちょっと、それは言わないって、この前……」

頬を赤くして瑞希の袖を引っ張った葉月に、

「^㉒いいじゃん、もう。ミニ四駆のチャンピオンのくせに、こういうことに関しては、昂樹ってすごい鈍ちんだからさ。黙ってたなら、絶対に葉月ちゃんの気持ちに気づかないから——」^㉓と言い含めたあとで、

「だから、うん、^㉔ちようどいいきつかけなんだよ、今日は」と、わかるようなわからないようなまどめ方をした。

昂樹は、耳たぶまで真っ赤にして俯いている葉月と、その隣で腕組みをしている瑞希を交互に見やった。しかし、適当な言葉がなかなか見つからない。

「で、どうなの昂樹。葉月ちゃんのこと、どう思ってるの？」

じれったそうに瑞希がうながす。

「え、あの、俺も好き、かも……」

「かも？」

瑞希が^㉕眉間に皺を寄せた。

「いや、俺もさ、葉月が好きだ」

瑛士の話だったはずなのに何で告白タイムになっちゃったんだろ、と胸中で首をひねりながらも、昂樹は言った。

ありがとう、と消え入りそうな声で言った葉月が、赤く染まった自分の頬に手をやった。

気づくと、昂樹も頬が火照って熱くなっている。

「なんでわたしが、あんたたちのキューピッドなんかしくちやならないんだろ」

^㉖口調とは裏腹に目を細めた瑞希が、真顔に戻って言う。

「葉月ちゃんのためにもリベンジしようよ、昂樹」

リベンジ、という言葉に、瑞希の顔を覗き込む。

「先生に告げ口するのが嫌だったら、自分で何とかするしかないじゃん。昂樹だって、葉月ちゃんに、これ以上かっこ悪いところ見せたくないでしょ」

それはそうだ。でも、しかし……。

「リベンジって簡単に言うけどさ。瑛士には勝てる気がしないというか、あいつに喧嘩で勝った奴はこれまで一人もいないの、瑞希だって知ってるだろ」

「そこはまあ、玉碎覚悟で」

「他人事だと思って適当な。痛い思いをするのはこっちなんだぜ」

昂樹が顔をしかめると、

「喧嘩なんかする必要ないよ——」葉月が割って入った。

「瑛士くんにきっぱり言ってやればいいと思う。クラスのみんなが見ている前で、これ以上嫌がらせをするのはもうやめろって。そういうこと、面と向かって瑛士くんに言ったことのある人って誰もいないでしょ？ だから、それだけで立派なリベンジになると思う」

「それいい——」と言って瑞希が目を輝かせる。

「さすが葉月ちゃん。やっぱりわたしみたいのがさつな人間とは違うよねー。そうだ、どうせなら昼休みにさ、クラスの全員を集めて、みんなの前で言うといいかも。そしたら昂樹、かっこいいよ」

「そうだね。クラスのみんなが見ている前なら、瑛士くんも迂闊には暴力をふるえないだろうし」

「そうそう、みんなの前で宣言すればさ、昂樹がいじめられてたのを知らなかった子も含めて、全員が知っちゃうわけでしょ。そしたら瑛士、クラス全部を敵に回すことになっちゃうじゃん。いくらあいつでも、あとで仕返しがいにくくなると思う」

本人を差し置いて、二人はすっかりその気になっている。

しかし、考えれば考えるほど、それが最善の方法のような気がしてくるのも確かだ。

問題はそんな勇気が自分にあるかどうかなのだが……。

迷っている昂樹を葉月が真剣な眼差しで見つめる。

「大丈夫だよ、わたしがついてるから。瑛士くんが昂樹くんに何かしようとしたら、わたしが間に入って守ってあげるから。ね、だから勇気を振り絞って、頑張って」

「あつ、妬けるなあ。いよつ、ご兩人。ひゅうひゅう」

どこのおじさんかと勘違いしそうになるような瑞希のリアクションに、思わずずっとこけそうになる。

「瑞希、おまえなあ……」

そう言いながらも、昂樹の気持ちは固まった。

明日、クラスみんなが見ている前で瑛士と対決しよう。⁵ いざとなったら、膝がかくかく震えそうだし、声も上ずりそうだけれど、葉月と

そして瑞希が応援してくれるなら、なんとか乗り切れそうだ。

「わかった。俺、明日、瑛士と対決して、あいつにリベンジする」

「言ったね、昂樹。絶対だからね」

「応援してるから、頑張って」

「うん」

昂樹が頷くと、

「うーん、愛の力の何と偉大なことよ——」芝居がかった口調で言った瑞希が、「さ、ラーメン食べに行こ。葉月ちゃんも一緒だよ」と言って、ぱんと一つ手を叩いた。

その音が、神社の境内に響く。

三人で顔を見合わせた。

誰が言い出すでもなく、本殿の前に一列に並ぶ。

「誰か十円持ってる？」

真ん中に立った瑞希が左右に首をねじって尋ねる。

ズボンのポケットを探ってみると、硬貨が一枚、指先に触れた。

「あー、あった。あ、でも十円じゃなくて五円玉だ」

「いいじゃん、それで」

ちゃりんと賽銭箱から音が昇り、頭上の鈴がガラガラと鳴る。

パンパン、という三つの拍手が社殿の屋根に反響して気持ちのいい音を立てた。

三人がそれぞれ何を祈っているのか、互いにはわからない。しかしそれは、信頼という絆で結ばれた今の昂樹たちにとって、大きな問題ではなかった。

そして何より、⁶ あれだけ嫌だったはずの明日が来るのが待ち遠しい。

(熊谷達也『リベンジ』)

問一 ㉑㉒の語句の意味として、よいと思われるものを次の中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

㉑ 「あえて」

アⅡ進んで イⅡしいて ウⅡがまんして エⅡ意地悪く オⅡひたすら

㉒ 「さすがに」

アⅡつい イⅡもう ウⅡもはや エⅡやはり オⅡとうとう

㉓ 「うやむやに」

アⅡいいかげんに イⅡのぼしのぼしに ウⅡしりきれとんぼに エⅡひっこみがつかなく オⅡどうどうめぐりに

㉔ 「うろたえて」

アⅡあせって イⅡまごまごして ウⅡおろおろして エⅡまいて オⅡまよって

問二 ㉕・㉖を説明したものととして、よいと思われるものを次の中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

㉕ 「頬を膨らませる」

ア 昂樹の様子がおかしくてこのままではいけないということを昂樹にわかってほしくてあせっている。
イ 昂樹に対するいじめがきっかけとなって葉月と昂樹の仲がよくなりそうだと予感して興奮している。
ウ 昂樹の身の上に起こっていることなのに他人事のように言う鈍感な昂樹に対してふくれっ面をする。
エ 昂樹のことが好きだから勇気を出して訊いたのに無視をする昂樹に向かって不信任を表に出す。
オ 昂樹のことが心配で仕方がないから言っているのに昂樹がとぼけているので不満げな顔つきをする。

⑧「眉間に皺を寄せた」

ア 好きだと言うののできるだけ引きのばそうとしている昂樹の態度に腹立たしい気持ちを示した。
イ 葉月の気持ちを知ってもはつきりした返事をせずにお茶を濁そうとする昂樹の態度に不快感を示した。
ウ 葉月と瑞希の顔色をうかがっているばかりの昂樹の態度に激しい怒りを感じていることを示した。
エ 葉月に恥ずかしい思いをさせておきながら自分だけ優位に立とうとする昂樹の態度に嫌悪感を示した。
オ 葉月と瑞希とを両天秤にかけようとしている昂樹のにえきらない態度に強い反感を示した。

問三 ①「大丈夫じゃないよ！」とありますが、葉月はなぜそう言ったのですか。説明しなさい。

問四 ②「いいじゃん、もう」とありますが、これは、どういうことを言おうとしているのですか。ここまでのいきさつをふまえて説明しなさい。

問五 ③「ちようどいいきっかけ」とありますが、この時瑞希はどういう思いでいるのですか。よいと思われるものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 以前から聞いていた葉月の昂樹への思いを伝えるなら、昂樹へのいじめが見てられない状態になった日こそがふさわしいと思って
いたから、今日こそちようどよい機会だと喜んでこのなりゆきにまかせようとしている。
イ 昂樹は引っ込み思案だから葉月のことを好きだと思いながらもずっと言い出せずにいたのだということを見抜いて、葉月への思いの
たけをうちあけるなら今が絶好の機会だということを知らせようと思って気がはまっている。
ウ 葉月から昂樹への思いを聞かされた時に、自分も昂樹のことが好きだったのに先を越されて打ち明けられてしまったと思って後悔し
たからこそ、二人の仲を取り持つことで自分の思いがふっきれるいいきっかけだと気を取り直している。
エ 昂樹は鈍感なのでこのままでは葉月の好意に気づくこともなく、二人の仲には進展が見込めなかったところ、いじめの解決というよ
い口実ができたことによって、葉月の気持ちを昂樹に伝える願ってもない機会ができたと思おうとしている。
オ 昂樹はミニ四駆のチャンピオンのくせに、好きな女の子の思いを伝えることについては不器用すぎるので、今日という日を逃したら
今度はまたいつ告白できるかわからないということを感じかせようとやっきになっている。

問六 ④「口調とは裏腹に目を細めた」とありますが、この内容がよくわかるように言葉を補って表現を言い換えなさい。

問七 ⑤「いざとなったら、膝がかくかく震えそうだし、声も上ずりそう」とありますが、どうしてこのように思ったのですか。よいと思われ
るものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 瑛士と対決するといっても、生まれて一度も喧嘩をしたことがない昂樹には喧嘩のやり方がわからなかったから。
イ 瑛士と対決するといっても、どうしても痛い思いをしたくない昂樹は殴られることが恐くてしかたなかったから。
ウ 瑛士と対決するとなったら、葉月とそして瑞希が応援してくれるので、昂樹はなんとか勝てそうな気がしてきたから。
エ 瑛士と対決するとなったら、葉月と瑞希をはじめクラス全員が昂樹の味方になるだろうと想像し、緊張してきたから。
オ 瑛士と対決するといっても、喧嘩で瑛士に勝った奴はこれまで一人もいないし、そんな勇気がわくか不安だったから。

問八 ⑥「あれだけ嫌だったはずの明日が来るのが待ち遠しい」とありますが、その理由として、よいと思われるものを次の中から一つ選んで、
記号で答えなさい。

ア 瑞希のおかげで葉月が自分に対して好意を寄せてくれたことを知ることができ、昂樹自身も葉月への好意を打ち明けることがで
きた結果、両思いであったことがわかり有頂天になったから。
イ 明日は瑛士との対決だと思わず武者震いが出るほど興奮したが、たとえ喧嘩になったとしても葉月と瑞希の応援さえあればな
んとか乗り切れそうだと思って百人力を得た気になったから。
ウ 葉月と瑞希の応援も得られるのならば、明日こそクラスのみんなが見ている前で瑛士と対決し、話をするによってこれ以上の昂
樹に対する嫌がらせをやめさせるための一歩が踏み出せると思えたから。
エ 瑛士に腕力ではかなわないので、瑛士と対決して勝利を収めるには愛の力で戦うしかないと思っていたところ、瑞希も認めてくれた
ように、葉月に好意をもたれていることがわかり、ほっとしたから。
オ 瑛士にはずっと前からいつかりベンジしようと思っていたところ、葉月と瑞希とが応援してくれるということを知り、明日こそが
今までの恨みをはらせる記念の日になると思いうれしくなったから。

